

廃城後の 鑄造工房

発掘調査では、廃城となった後の姿も明らかとなりました。

城跡の内郭部は鑄造工房として、外郭部は田の字形に4分割して工人の屋敷地となっており、工房跡からは蔵と考えられる礎石建物や溶解炉・鑄込み穴などが検出され、鍋・釜・仏具・農具などを製作していたことがわかりました。

高田土居城跡の周辺では、これまでも江戸時代の鑄造に関する遺構や遺物が見つかっており、これらは全国の鑄物師（金属の鑄造を行う職人）を束ねる「真継家」の文書にも登場する「高田氏」に関わるものと考えられています。



溶鋳炉を転用した井戸



内郭の跡地で見つかった鑄造工房

明らかとなる みなべの歴史

中世の城が当時の文献資料に記述されることは稀ですが、守護畠山氏の政治的拠点である高田土居城と、軍事的拠点である平須賀城は、目良家文書や湯河家文書などの諸家文書に数多く登場します。これらの文献資料に両城が登場するのは15世紀から16世紀前半頃までですが、平須賀城跡では15世紀から16世紀前半までの遺物しか出土しておらず、また高田土居城跡でも16世紀半ばには外郭の土塁が削平され、外堀が機能していないことが発掘調査から明らかとなっています。周辺の山城跡から出土する遺物も15世紀から16世紀前半までであり、これは畠山氏の勢力が衰え、この地域への影響力が低下したことにより、城に籠っての戦いがなくなったからと推測できます。

発掘調査の成果や文献資料によって、高田土居城を中心とした16世紀前半のみなべ周辺の戦国時代の画期・転換点を鮮やかに描き出すことができた遺跡です。また廃城後の鑄造工房は、中世末期における地方の鑄造実態を復元する上で、貴重な資料であると言えます。

編集・発行元：公益財団法人和歌山県文化財センター
〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1 TEL：073-472-3710 FAX：073-474-2270
発行日：2021年3月31日 印刷：初田印刷株式会社

令和2年度国宝重要文化財等保存・活用事業費（地域の特色ある埋蔵文化財活用事業）の補助金を受けて作成しました。

和歌山県の文化財⑤

みなべ町

高田土居城跡

— 守護勢力が築いた居館 —

ただだといじょうあと

2021

公益財団法人 和歌山県文化財センター

遺跡の概要と 発掘調査の経緯

抑える目的で室町幕府の紀伊国守護であった畠山氏によって築かれたと考えられています。

畠山氏の家督争いが発端の一つとなった応仁の乱（1467年）以降、二手に分かれた畠山氏が争いを繰り広げることとなり、高田土居城・平須賀城の争奪戦がたびたびおこなわれたことが文献資料から読み取れます。その後、16世紀の半ばには畠山氏の勢力が衰えたことから高田土居城は16世紀前半頃に、平須賀城は16世紀後半までに廃城となったと考えられています。高田土居城跡は、その後昭和40年頃までは水田に埋没した形で方形区画とそれを取り巻く堀の痕跡が地表に残っていましたが、次第に城の旧状は失われつつありました。

高田土居城跡及び徳蔵地区遺跡の発掘調査は、近畿自動車道のインターチェンジ建設や県道の拡幅工事に伴い、平成9年から16年度かけて実施しました。調査地は南部平野に残る条里型地割の南端に位置し、鎌倉時代以降、連綿と水田が営まれてきた場所でした。

発掘調査の成果

高田土居城跡は、発掘調査により、前後2時期（Ⅰ期・Ⅱ期）に分けることができ、Ⅰ期段階ですでに70m×50mの内郭の外側に幅約13mと約5mの堀をめぐらし、更にその北側に幅8mの堀をめぐらせた外郭を備え、面積も20,000㎡を超えることが明らかとなりました。Ⅱ期にはさらに規模が拡大し、Ⅰ期の内郭を囲む外側の堀を埋め立てて新たな堀を付け替えるなどし、南北225m、東西150mで面積30,000㎡と厳重な防御機能を備えた、当時の守護館に匹敵する規模を持つ平地居館であったことが判明しました。また、Ⅰ・Ⅱ期を通して内郭・外郭の外側に土塁をめぐらせていたことも明らかになりました。



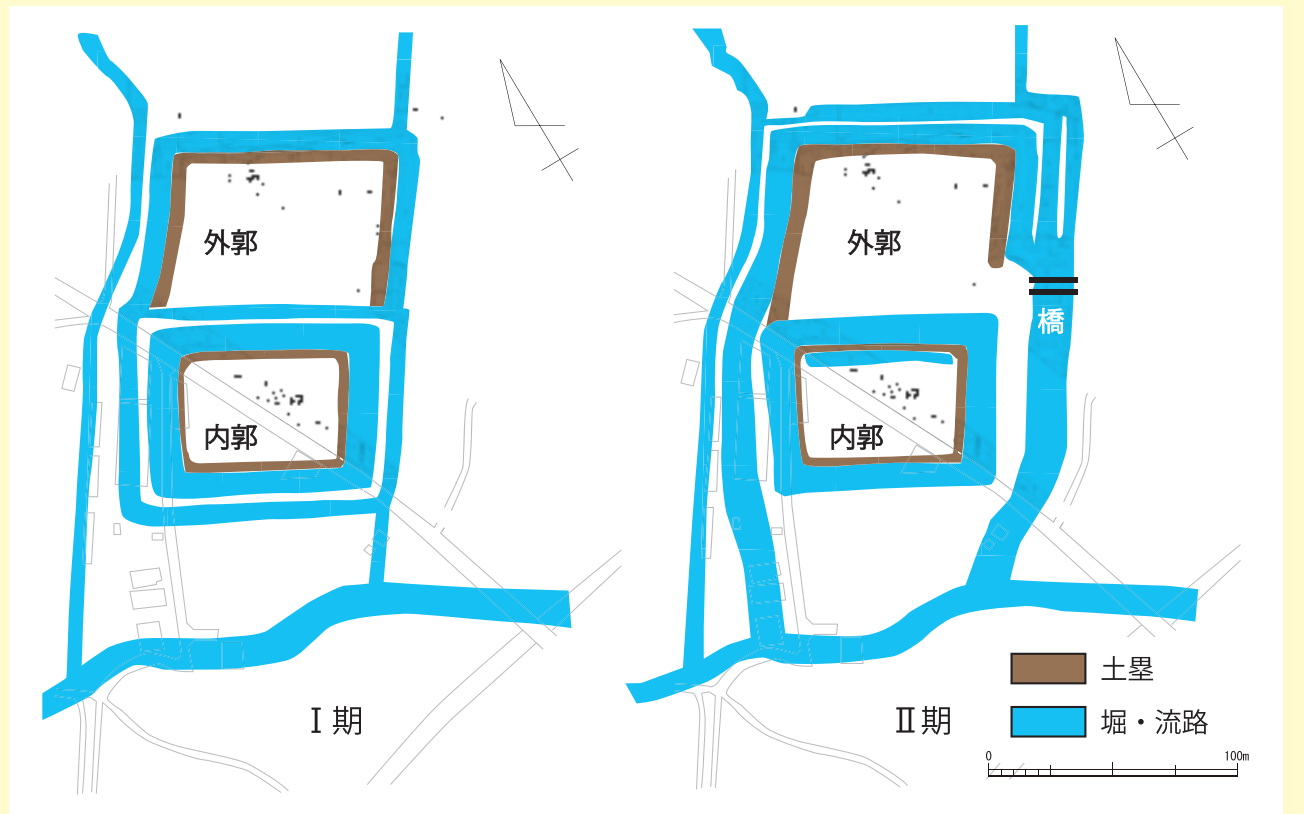
橋脚跡



内堀



高田土居城跡と周辺の城跡



高田土居城の変遷（復元図）

発掘調査で出土した多量の土器類の中で「かわらけ（土師器皿）」の量が突出していたことが注目されます。これは越前の戦国大名である朝倉氏の館跡や御坊市に所在する室町幕府の奉公衆として知られる湯河氏の湯川氏館等と類似しています。かわらけは法量が異なる4つのタイプがあり、一度だけ使用して大量に廃棄する武家儀礼（式三献）が行われていたことを裏付けるものと言えます。高田土居城跡が、当時京都に所在した足利将軍邸である「花の御所」を意識した大規模な方形居館であることなどから、防御のための城というだけではなく、畠山氏の重要な政治的拠点の一つであったと考えられます。



大量に廃棄されたかわらけ（土師器皿）



室町殿（花の御所）で見つかった景石群
提供：（公財）京都市埋蔵文化財研究所

「花の御所」とは？

「花の御所」とは、室町幕府の足利将軍家の邸宅のことで、室町幕府3代目将軍足利義満が造営したことに始まります。邸宅内の庭園には数多くの花木が植えられており、邸宅の正門が室町通に面していたことに由来し「室町殿」とも呼ばれ、室町幕府の名前の由来ともなりました。

これまでの発掘調査で邸宅の範囲や建物跡、庭園遺構が検出しています。2020年（公財）京都市埋蔵文化財研究所が実施した邸宅南部東端での発掘調査では、池や9石の景石群を検出しており、室町幕府の将軍邸宅としてふさわしい規模や庭園を有していたことが明らかとなりました。